

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：32401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720149

研究課題名（和文） 意味排除主義と自然言語の規範性に関する研究

研究課題名（英文） Research on Meaning Eliminativism and Normativity in Natural Language

研究代表者

酒井 智宏 (SAKAI TOMOHIRO)

跡見学園女子大学・文学部・助教

研究者番号：00396839

研究成果の概要（和文）：「文脈から独立した言語的意味」という概念が自然言語の意味論から除去されるべきであることを示した。トートロジー（「猫は猫だ」）分析で用いられる「等質化」概念（「どの猫も似たり寄ったりだ」）に見られる理論的混乱は、語（「猫」）の意味の共有という想定を放棄すれば解消される。矛盾文（「ねずみを捕らない猫は猫ではない」）に見られる規範性解釈（「ねずみを捕らない猫は猫と呼ばれるべきではない」）は、複数の異なる言語システムの対立から生じる。

研究成果の概要（英文）： This research showed that the notion of linguistic-independent meaning should be eliminated from the semantics of natural language. The confusion about the notion of homogenization, evoked for the analysis of tautologies of the form $X \text{ is } X$, can be dissolved if we do not consider the meaning of the word X to be shared between speakers when $X \text{ is } X$ is uttered. The normative interpretation of $X \text{ is not } X$ comes from the conflict between different linguistic systems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：自然言語、規範性、文脈主義、意味排除主義

1. 研究開始当初の背景

言語哲学において、字義主義とは「文は使用から独立した言語的意味 (=命題) をもつ」というフレーゲ以来優勢な立場であり、文脈主義とは「文はいかなる意味でも命題の担い手ではなく、文脈中で言語使用者が命題を構築するための手がかりにすぎない」とする立場である。近年、日常言語学派の著作の再検討を通じて文脈主義を再評価する動きが高

まっている。報告者は、これをトートロジーに適用し、「文が表す字義通りの命題」と「発話が文脈中で伝達する命題」の区別を正当化するかに見えたトートロジーが、実は字義主義の終焉と文脈主義の復権を意味する現象であることを示した。

語に関する字義主義では、語は文脈から独立した抽象的意味をもち、これが語の使用条件として働くとされる。それによると、我々が個々の状況で「猫」という語を正しく使え

るのは、猫という語の文脈独立的な抽象的意味 (=使用条件) を正しく理解しているからである。語に関する我々の素朴な考え方は字義主義的であり、辞書は語の文脈独立的な意味を記録したものと考えられている。この点で、語に関する字義主義は文に関する字義主義以上に我々の思考法に深く根を下ろしていると言える。これに対して、語に関する文脈主義では、「語の使用条件としての文脈独立的な意味」という概念は意味論にとって必要でも十分でもなく、危険ですらあると考える。語に関するラディカルな文脈主義は特に意味排除主義または無意味論と呼ばれ、後期ウィトゲンシュタインにならい、言語の使用に先立つ言語的意味の存在を完全に否定する。

本研究開始当初、「語の言語的 (=辞書の) 意味の記述」を目標の一つとする言語学では意味排除主義が真面目に取り上げられることはなく、その存在すらほとんど知られていなかった。

2. 研究の目的

- (1) 文に関してはもちろん、語に関しても、「文脈から独立した言語的意味」という概念が自然言語の意味論から除去されるべきであることを示す。
- (2) 特にコンピュータ文に焦点を当てて、我々の言語によるコミュニケーションの一部が「複数の言語システムの絶えざる接近と乖離」であり、これが言語における規範性の源泉であることを明らかにする。
- (3) 言語的意味という概念が理論的には除去されるべきものでありながら、我々がそこに実在性を見出してしまう理由を探る。

以上により、言語哲学における文脈主義的意味観、メンタル・スペース理論などにおける構築主義的意味観の妥当性が裏付けられることになる。

3. 研究の方法

- (1) 「語の言語的意味」が語の使用を統制しないことを示すために、後期ウィトゲンシュタイン以降の哲学文献を言語学的観点から読み直した。
- (2) 複数の言語システムの接近という概念に関して、語の使用の評価のたびに意味が決められていくという根元的規約主義の考え方を精緻化した。
- (3) (1-2)に基づき、規範性言明が生まれる道筋を描き出した。
- (4) 複数の言語システムの接近により生じる規範性の概念に基づき、 $a=b$ 型の同一性言明の意味論を定式化した。

4. 研究成果

- (1) 自然言語のトートロジー「 X は X だ」について次のことを示した。「トートロジー『猫は猫だ』はすべての猫の等質性を伝達する」という分析 (等質化理論) は、認知意味論におけるプロトタイプ理論と合流することにより、トートロジー研究の標準理論と言えるまでになっている。本研究では、等質化理論が実は不整合を内包しており、その不整合が意味の共有という幻想に根ざすものであることを論証した。等質化理論を前提とするかぎり、「 P である X は X でない」と「 P であっても X は X だが対立する場面において、「 P である X 」(以下 p とおく) が X であると仮定しても、 X でないと仮定しても、矛盾に至る。この矛盾は、 X の意味を固定したうえで、「 p は (真の) X か」と問うことから生じる。実際には、この対立は「 X の意味を p を含むようなものとするべきか」という言語的な対立であり、 p の所属をめぐる事実的な対立ではない。これまで、哲学者・言語学者は、トートロジーを「 X が X であるという当たり前の事実を述べる文」とみなしてきたが、実情はこれと逆であり、トートロジーは、われわれの動機の自由、およびそこから生まれる言語記号の恣意性を前提として成立する発話である。もしも、動機の自由がなく、決まった範囲の概念の伝達しか行わない言語共同体があったとしたら、その共同体にはトートロジーは存在しえないと予測される。日常言語においては、「猫」のような基本語の意味でさえ、常に共有されているわけではなく、トートロジーのような言語表現を通じて、恣意的に、創造的に取り決められうる。そして、これこそがソシュールの言う「言語記号の恣意性」が真に意味していることにほかならない。
- (2) 矛盾文「 X は X でない」に関して次のことを示した。矛盾文は、単なる事実報告 (「問題の対象は X と呼ばれない」) として解釈される場合と、規範性言明 (「問題の対象は X と呼ばれるべきではない」) として解釈される場合とがある。規範性を表す表現がないにもかかわらず、矛盾文が規範性言明としての解釈をもつのは、(i) 語 X の適用に不一致が生じ、(ii) その不一致が事実認識の不一致によるものではないとみなされ、(iii) 不一致を起こしている他者を話者が自らの言語共同体の成員 (同胞) とみなし続けるときであり、かつそのときだけである。コンディヤックの「二つのまちがい」をめぐる議論をふまえると、事実認識に基づかない判断がくいちがう場面では、ただちに当事者が属する言語共同体

の存在が浮かびあがってくる。このとき、ウィトゲンシュタインの言う言語（によるコミュニケーション）の成立基盤を回復すべく、言語使用者たちが再び一つの言語体系に収束していこうとする運動が生じ、ルソーの「同胞と憐れみ」の原理により、言語使用の不一致を起こしている他者は「矯正されるべき他者」として立ち現れる。こうして、語の適用の不一致から自然言語の規範性が生じる過程を自然な一本道として理解することができる。「べし」という規範性概念は、「べし」という言語表現のないところから生じるのである。

- (3) a = b型の同一性言明に関して次のことを示した。分析哲学において、a = b型の同一性言明を事実言明だと考えると、自然言語の固有名が実は固有名ではないという逆説的な結論に至り（ラッセルの議論）、文法言明だと考えると、その認識価値が説明できなくなる（フレーゲの議論）ことが知られている。本研究では、フォコニエのメンタル・スペース理論を用いた「言語学的」解決と称されるものを退けた後、a = b型の同一性言明が、新たに導入される記号のあいだの真理保存的置換可能性ではなく、現に使用されている二つの記号aとbのあいだの真理保存的置換可能性を述べる文であるという事実注目することにより、文法言明の難点を克服した。この立場によると、文法言明は、それ自体が認識価値を有するのではなく、その規範的力（今後aに関するいかなる命題Pに出会おうとも、Pは、aをbに置き換えて得られる命題Qと同一の真理値をもつ）により、間接的に認識の拡大に寄与する。こうして、フレーゲ『概念記法』およびウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』で示唆されながら、その後まともに取りあげられることのなかった文法言明を、言語学的検証に耐えうる形で復権させることができる。この考え方の利点として、「固有名の意味 = 対象」というJ.Sミル流の素朴な意味論を維持することができ、かつ間接話法において真理保存的置換原理が成り立たない理由を説明することができるという点が挙げられる。さらに、文法言明は、佐藤信夫によって示唆され、野矢茂樹によって主張された「同一性概念を理解できるのは、言語をもつ生物に限られる」という哲学的テーゼの妥当性に裏づけを与えるものである。
- (4) 以上の成果をふまえ、「科学としての言語学」という考え方の検討に着手した。言語学の教科書は、言語学とは人間の心を研究する科学、すなわち認知科学であると謳ってきた。言語は人間による世界認識の反映であり、言語を研究することで人間の心の本質に迫るのが言語学の究極の目的な

のである。だが、いったい、言語とは誰の何の認識の反映なのか。日本語では太陽の色は赤であり、フランス語ではjaune(「黄色」)である。言語が人間による世界認識の反映であるとする、日本人とフランス人は太陽の色を異なる色として認識していることになる。しかし、ここから「日本語には単複の区別がないから、日本人は一つの机と複数の机の違いを認識していない」といった暴論まではもう一步である。こうして、「言語 = 世界認識の反映」という図式は早くもほころびを見せ始める。言語学では、「言葉は液体である」といった「深層の比喩」が語られることがある。ここでは、『言葉は液体である』と考えると言語現象が整合的に説明できる」という事実から自動的に「母語話者は無意識のうちに『言葉は液体である』と思っている」という結論が導き出されている。こうして言語学者は「無意識の信念」のような心理的実在性の欠如した心的概念の存在にコミットしていくことになる。その最たるものが、メンタル・スペースに代表される心的表示である。そうした難解な意味表示は心理的実在性を決定的に欠いており、その実在が脳科学によって実証されることはおそらく将来的にもない。また、難解な心的表示を読み取る主体としてホムンクルス(脳の中の小人)を仮定せざるをえない。かくして、「言語学は人間の心を研究する科学である」という言語学者のかけ声は虚しいだけのものとなる。言語学は何の哲学的反省もなく正体不明の心的概念を次々と仮定しているにすぎない。その結果、教科書文法・学校文法で十分理解できることを、わざわざ難解な理論言語に言い換えているにすぎない。このままでは、言語学と他分野との相互理解に支障をきたすことが危惧される。この状況を超克するためには、「言語科学の哲学」の視点が不可欠である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

1. 酒井 智宏「自然災害は天罰か？—サン・ビエールが消えた日—」『人文学フォーラム』(跡見学園女子大学)第11号、査読無、2013年3月、pp.59-76。
http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/atomi_jinbun11_08.pdf?file_id=31571
2. Sakai, Tomohiro. «L'énigme des énoncés d'identité de type «a = b»: Une solution grammaticale», 『フランス語フランス文学

- 研究』第101号、日本フランス語フランス文学会、査読有、2012年9月、pp.23-37. http://ci.nii.ac.jp/els/110009543613.pdf?id=ART0009985914&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1370524575&cp=
3. 酒井 智宏「矛盾文と自然言語における規範性の源泉」、『東京大学言語学論集(TULIP)』第32号、査読有、2012年9月、pp. 255-276.
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/52751/1/ggr032009.pdf>
 4. 酒井 智宏、「トートロジーにおける言語情報と文脈情報の相互作用」、坂原 茂(編)『フランス語学の最前線』第1巻、査読有、2012年6月、pp. 187-217.
 5. Sakai, Tomohiro. “Contextualizing Tautologies: From Radical Pragmatics to Meaning Eliminativism”, *English Linguistics* 29-1, 日本英語学会、査読有、2012年6月、pp.38-68.
 6. 酒井 智宏「トートロジーにおける等質化概念の混乱とその解消—意味の共有をめぐる幻想—」、『東京大学言語学論集(TULIP)』第31号、査読有、2011年9月、pp. 269-286.
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/52739/1/ggr031016.pdf>
 7. 酒井 智宏「トートロジーの主観性の源泉でないもの」、『東京大学言語学論集(TULIP)』第30号、査読有、2010年9月、pp. 195-214.
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/52719/1/ggr030012.pdf>

[学会発表] (計7件)

1. 酒井 智宏、*« Le contextualisme est-il une menace pour la compositionnalité ? : Composition et articulation »*, 日本フランス語フランス文学会 2012 年度秋季大会、神戸大学、2012 年 10 月 20 日.
2. Sakai, Tomohiro. *« La sémantique kaplanienne et la forme -tte en japonais »* Vingt-cinquièmes Journées de Linguistique d'Asie Orientale, CRLAO / EHESS (Paris), le 28 juin 2012 [第 25 回東アジア言語ワークショップ、東アジア言語学研究所 / フランス国立社会科学高等研究院、フランス共和国パリ市、2012 年 6 月 28 日].
3. 酒井 智宏、「言語学者が言語学についてずっと知りたと思っていた (けど恥ずかしくて聞けなかった) 2、3 のこと—言語学は何を研究する学問か—」日本フランス語フランス文学会 2011 年度秋季大会ワークショップ「科学としての言語学が斬り捨てた問い—言語科学の哲学に向けて—」、小樽商科大学、2011 年 10 月 9

日.

4. 酒井 智宏、*« L'énigme des énoncés d'identité de type 'a = b' : Une solution grammaticale »*, 日本フランス語フランス文学会 2011 年度秋季大会、小樽商科大学、2011 年 10 月 8 日.
5. 酒井 智宏、「トートロジーにおける等質化概念の混乱とその解消」、日本フランス語フランス文学会 2010 年度秋季大会、南山大学、2010 年 10 月 16 日.
6. Sakai, Tomohiro. *« L'opposition entre X n'est pas X et X est X est-elle argumentative, conceptuelle, ou linguistique ? : une perspective de la théorie des stéréotypes »* Journées scientifiques tuniso-japonaise : La stéréotypie, Mahdia, Tunisie, le 22 septembre 2010. [筑波大学・パリ第 13 大学共同開催ワークショップ、チュニジア共和国マハディア市、2010 年 9 月 22 日].
7. Sakai, Tomohiro. *« Against the Minimal Proposition: The Case of X is (not) X »*, The 3rd One-day Workshop on Pragmatics: Context, Contextualization, and Entextualization, Fuji Women's University (Sapporo, Japan), September 9, 2010 [第 3 回語用論一日ワークショップ、藤女子大学、2010 年 9 月 9 日].

[図書] (計 2 件)

1. 酒井 智宏(著)『トートロジーの意味を構築する—「意味」のない日常言語の意味論—』(ISBN: 978-4-87424-565-1)、くろしお出版、2012 年 12 月、全 431 + ix ページ.
2. 髭 郁彦、川島 浩一郎、渡邊 淳也(編著)、安西 記世子、小倉博行、酒井 智宏(著)『フランス語学小事典』(ISBN: 978-4-411-02126-7)、駿河台出版社、2011 年 5 月、全 271 ページ。(概念 82 項目、人名 25 項目の執筆を担当。)

[その他]

ホームページ等
tomohirosakai.web.fc2.com

6. 研究組織
- (1) 研究代表者
酒井 智宏 (SAKAI Tomohiro)
跡見学園女子大学・文学部・助教
研究者番号：00396839
 - (2) 研究分担者 ()
研究者番号：
 - (3) 連携研究者 ()
研究者番号：